

平成 17 年 4 月

## 第 14 回日本医療薬学会年会 実施報告書(最終版)

事業名 第 14 回日本医療薬学会年会

主催者 日本医療薬学会

年会長：緒方 宏泰(明治薬科大学薬剤学教授)

会 頭：乾 賢一(京都大学医学部教授・附属病院薬剤部長)

後 援 (社)日本病院薬剤師会、(社)日本薬剤師会、(社)東京都病院薬剤師会、(社)東京都薬剤師会、(社)日本薬学会、(社)千葉県薬剤師会、千葉県病院薬剤師会、厚生労働省、千葉県

実施日程 平成 16 年 10 月 16 日(土)・17 日(日)

実施場所 幕張メッセ国際会議場(日本コンベンションセンター) 〒261-0023 千葉県千葉市美浜区中瀬 2-1

### 年 会 の 趣 旨

薬学教育 6 年制が確定する中で、病院薬剤師、開局薬剤師を問わず、薬剤師の質の高い医療貢献がいよいよ求められるようになってきた。広い意味での薬物治療を薬剤師の視点からいかにレベルアップし、国民の期待に応えているかが、より具体的に「見えるかたち」で問われてくると考えられる。薬学、薬剤師の歴史的な変換点に当たって、病院薬剤師・開局薬剤師・大学教員が共に、それぞれの役割、立場から、『薬剤師がつくる薬物治療』を考え、築いていく年会にしたい。

従来参加が少なかった開局薬剤師、大学教員、学生の参加も得て、有効、適正かつ安全な薬物治療を薬剤師の手でつくっていくための課題を総合的に討論・検討できる学会にしたいと考え、本年会では以下の基本 5 テーマに基づいた合計 17 のシンポジウムを企画した。

1. 疾病治療への薬剤師のかかわり : 高血圧症、糖尿病、骨粗鬆症及び悪性腫瘍の治療、感染予防など、病院、開局における薬剤師の治療への関わりを検討する。
2. 最新研究情報の現状と適用: PK/PD、代謝(CYP)など薬物動態の最新研究とその臨床への活かし方を検討する。また、治験への薬剤師のかかわり方について検討する。
- 3 情報を集め、評価し、活かしていく : IT 化の流れ、標準治療のガイドラインの作成、e-添付文書の利用など、情報の収集、共有も様変わりし、薬-薬連携、共有の条件も一部でつくられつつある。治療に利用していくための課題を検討する。
- 4 学生の研修教育、薬剤師の質的向上のための教育: 臨床現場での学生教育の内容や方法、教育者の育成、薬剤師の教育など教育問題の具体的な課題を、薬剤師、大学教員、学生が共同で考える場にしたい。大学院医療薬学学生の自主企画のセッションも企画する。
- 5 医療体制のなかでの薬剤師の役割: ジェネリック時代の薬剤師の役割及び病院・薬局マネジメントをテーマに、大きな視点から薬剤師の貢献を考える。

これらシンポジウムでは、座長、演者には病院薬剤師、開局薬剤師を依頼し、両者が共通の目的に向かってい

かに役割を担っていくかについて、更に、教育問題においては、大学教員、学生、病院薬剤師、開局薬剤師が、長期実務実習をいかに内容のあるものにしていくかについて、それぞれ考える場を提供したいと考えた。

会員の発表はすべて 3 分の説明を付けたポスター発表とし、また、座長には認定指導薬剤師に依頼し、会員全員参加型の運営を考えた。

ワークショップを企画し、今後、実務に教育に求められるであろう、EBM、薬物治療解析、コミュニケーションを演習を中心に学んでいただく場を提供した。

市民向け講演会を、東京都薬剤師会、東京都病院薬剤師会、産経新聞社との共催で開催し、身近な頭痛を取り上げ、鎮痛薬の使い方とともに、薬剤師への相談について理解をしていただく場を設けた。

懇親会はできるだけ気楽に交わりを深める場にするを考え、ミキサーの形式で、大学のクラブなどの有志参加を得る設定を考えた。

#### 参加費

参加費:	会 員	8,000 円	(事前登録)	10,000 円	(当日受付)
	非会員	12,000 円	(事前登録)	14,000 円	(当日受付)
	学 生	3,000 円	(事前登録)	3,500 円	(当日受付)
ミキサー:	一 般	5,000 円	(事前登録)	6,000 円	(当日受付)
	学 生	3,000 円	(事前登録)	3,500 円	(当日受付)

ワークショップ(事前登録のみ, 予約制): 5,000 円 (会員)          7,000 円 (非会員)

\*ただし、要旨集が足りなくなったため、要旨集なしの当日受付の参加者には会員 8,000 円、非会員 12,000 円、学生 1,500 円とした。

参加者数(最終集計)

会員	2171名(事前 1589名、当日 582名)
非会員	1473名(事前 711名、当日 762名)
学生	434名(事前 210名、当日 224名)
総数	4078名(事前 2510名、当日 1568名)
招待	233名(うち、韓国から21名、中国から14名)
招待者を含んだ総数	4311名
市民公開講座参加者	751名
公開シンポジウム	254名
ワークショップ参加者	EBM:60名、SOAP:43名、コミュニケーション:39名

年会参加者の所属内訳

	事前登録参加者		当日参加者		総数		
	会員	非会員	会員	非会員	会員	非会員	合計
病院	1235	588	456	463	1691	1051	2742
薬局	74	50	40	103	114	153	267
大学	190	26	51	32	241	58	299
企業	13	19	17	141	30	160	190
その他	77	28	18	23	95	51	146
学生	210		224		434		434
合計	2510		1568				4078

ワークショップ参加者内訳

	EBM		SOAP		Communication		総計		
	会員	非会員	会員	非会員	会員	非会員	会員	非会員	合計
病院	29	12	21	12	15	4	65	28	93
薬局	2	3	2	4	6	1	10	8	18
大学	10	1	2	0	8	4	20	5	25
その他	3	0	1	1	0	1	4	2	6

## 事業内容

1. メインテーマ「“薬剤師がつくる薬物治療”－薬・薬・学の連携－」
2. 年会長講演、特別講演2題、教育講演2題、招待講演1題、シンポジウム1～17(83題:うち一般公募演題18題、シンポジウム学生企画(学生の研修教育、薬剤師の質的向上のための教育))、ポスター発表690題(公募演題総計708題)
3. ミキサー、イブニングセミナー2、ランチョンセミナー12、機器・医薬品・書籍展示
4. 特別展示「実務実習の事前学習をどのように実施しているか」－薬学部・薬科大学のカリキュラム紹介－(参加大学34)
5. 特別企画(くすりの適正使用協議会との共催)(一般公開)、講演3題
6. 市民公開講座(東京都病院薬剤師会、東京都薬剤師会、産経新聞社との共催)(一般公開)、テーマ:「あなたの、いつもの頭痛を考えると」～かかりつけ薬局との上手なつきあい方～、講演2題ほか(10月15日(金)文京シビックホールにて)
7. ワークショップ(EBM、SOAP、コミュニケーション)、EBM(10月15日(金))、SOAP、コミュニケーション(10月18日(月))(幕張メッセにて)

## シンポジウムから

### シンポジウム14:実務実習モデル・コアカリキュラムの具体化に向けて

小グループ討議参加者	大学	47大学
	日本薬剤師会からの推薦者	20名
	日本病院薬剤師会からの推薦者	19名

参加大学: 北海道大学薬学部, 北海道医療大学薬学部, 北海道薬科大学,  
青森大学薬学部, 東北薬科大学, 新潟薬科大学, 千葉大学薬学部,  
城西国際大学薬学部, 城西大学薬学部, 北里大学薬学部, 共立薬科大学,  
昭和大学薬学部, 昭和薬科大学, 帝京大学薬学部, 東京薬科大学,  
東京理科大学薬学部, 東邦大学薬学部, 日本大学薬学部, 日本薬科大学,  
星薬科大学, 明治薬科大学, 静岡県立大学薬学部, 金沢大学薬学部,  
北陸大学薬学部, 名古屋市立大学薬学部, 名城大学薬学部, 岐阜薬科大学,  
京都大学薬学部, 京都薬科大学, 大阪大学薬学部, 大阪薬科大学,  
摂南大学薬学部, 武庫川女子大学薬学部, 神戸薬科大学,  
神戸学院大学薬学部, 岡山大学薬学部, 就実大学薬学部, 福山大学薬学部,  
広島大学医学部総合薬学科, 広島国際大学薬学部, 徳島大学薬学部,  
徳島文理大学薬学部, 九州大学薬学部, 第一薬科大学, 熊本大学薬学部,  
長崎大学薬学部, 九州保健福祉大学薬学部(47大学)

## 特別展示

「実務実習の事前学習をどのように実施しているか」－薬学部・薬科大学のカリキュラム紹介－

日時: 平成16年10月16日(土), 17日(日) 9:00-17:00

参加大学: 北海道医療大学薬学部, 北海道薬科大学, 東北薬科大学, 新潟薬科大学

千葉大学薬学部、城西大学薬学部、北里大学薬学部、共立薬科大学、  
昭和大学薬学部、昭和薬科大学、帝京大学薬学部、東京薬科大学、  
東京理科大学薬学部、東邦大学薬学部、日本大学薬学部、星薬科大学、  
明治薬科大学、金沢大学薬学部、北陸大学薬学部、静岡県立大学薬学部、  
名城大学薬学部、京都薬科大学、大阪薬科大学、摂南大学薬学部、  
神戸学院大学薬学部、神戸薬科大学、武庫川女子大学薬学部、  
広島国際大学薬学部、福山大学薬学部、徳島文理大学薬学部、  
九州大学薬学部、第一薬科大学、長崎大学薬学部、  
九州保健福祉大学薬学部(34 大学)

## 事業成果

参加登録者数が昨年の 13 回年会を約 1,000 名上回る 4,075 名となった。今回は特に開局薬剤師、大学教員・学生の参加を促すための宣伝、企画を行ったが、参加者の会員／非会員でみると、大学は241／58と非会員が少なく、予期した程の掘り起こしができなかったことを示している。一方、薬局では114／153と非会員の参加者が相対的に多くなっており、成果となっている。また、学生の参加者数が総数434名と多くなっているが、企画に対するこの層の反応が最も高かったことが明らかとなった。

薬剤師が薬物治療に病院薬剤師、開局薬剤師がそれぞれの持ち場から、薬剤師の視点から関与していくことをテーマに、関連するシンポジウムを企画したが、各会場は収容人数をはるかに超え、一部の会場では室外にモニターを設置した。一部の会場では、モニターの前の床に座り込んで聞く参加者も現れた。シンポジウムの企画内容が参加者の意向、関心にフィットしていた結果であると言える。その点では、学会としての活動、目標の設定は、職能団体の学術集会とは異なった視点から行うことが必要であることを物語っている。医療薬学会の今後の活動方向を考えるうえで、重要な問題提起となることを期待する。

開局薬剤師と共通の場を設定し、学会として共通化する試みは、とりあえず、端緒にはついたと考えるが、この努力の継続が必要である。表面的な言葉だけの連携に終わらずことなく、学会としての追及が求められる。

6 年制が決定され、大学教員の医療薬学の教育と研究への模索が層として開始されつつある。従来の個人の努力の域からは脱した視点で、学会活動は計画されるべき時代にさしかかっている。薬学会が 6 年制カリキュラムの作成や医療薬学教育の対し大きな影響力を持って介入してきているが、医療薬学に直接にたずさわる教員、指導薬剤師、学生の声と意見を集約する行動においては弱点を有している。しかし、医療薬学会がそれに変わる受け皿としての活動が弱く、市民権を得るには至っていない。今回の医療薬学教育委員会が企画した2つのシンポジウムは、大きな反響を与えることができ、初期的成果をあげることはできたが、急速に進んでいる新学制におけるカリキュラム、共用試験、実務実習の体制作り、内容作りへの関与、貢献の仕方については、未だ模索段階である。6年制教育内容、体制の構築は、薬学会を中心に進められているが、医療・臨床の現場の薬剤師の意見を組み入れていく点に弱さが認められるため、本学会が積極的に介入すべきと考える。

医療薬学という共通の場に、病院薬剤師、開局薬剤師、教員が集まるという形はできつつあり、今回 4000 名が集まることとなった。今後、日常の学会の活動のあり方、また、局部的には年会のあり方において、従来の活動からの質的な転換を迫られてきている段階に急激な速度で到達したと考える。今後の十分な検討を期待したい。